

「あらためて、すべての『この子に』幸あれ」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 2学期の始業式からの続きの話

部活動で活躍した生徒へのステージ上での表彰は、かねてより基本的に行わないという本校。でも、「夏休み中の部活動の成果として全校生徒に伝えてくれたら…」そう提言してくれたのは澤田先生です。そこで、結果一覧をいただいたのですが、読み上げるだけでは何処か冷たいような気が私はしたのです。そういうわけで、校長式辞の一部の時間を割き、あのようなスタイルでお伝えすることにしました。

まずは表彰される生徒に起立してもらい、全校生から拍手。続いて、大会に参加してはいないけれど、同じ部活動に所属している生徒には起立してもらい、「支えてくれて有り難う」との私からお礼の言葉。とは言え、戸惑いと恥じらいですかね。表彰される生徒以外はあまり起立してもらえませんでした。この次の機会には立ち上がってくれると嬉しいですね。誇らしく、しかも格好よくね。

では、この場をお借りしてあらためて。

『令和7年度全国高等学校総合体育大会登山大会 団体男子第20位 神戸高校山岳部』

『第77回兵庫県高等学校ユース陸上競技対抗選手権大会 2年男子5000m第2位 工藤光顕くん』

『小倉百人一首競技かるた 第10回近畿地区大会兵庫県予選B級の部優勝 中村友香さん』

おめでとうございます。そしてそばでともに努力を重ねてきた部員の皆さん、ありがとうございます。

また、先月末には『PDA 関西公立高等学校即興型英語ディベート交流大会2025』で活躍してくれた生徒もいます。与えられたテーマに対して、賛成側と反対側に分かれての即興での英語ディベートは高難度ですが、本校では秋田真歩さんがエキシビジョンディベータ賞に輝いたほか、高木朔生くん、湯翔麟くんがベストディベータ賞に選ばれるなどの活躍で、チーム神戸高校として見事に第3位。全8枚の賞状は早速、校長室前に貼られました。



さらに、賞状と盾を持参して、校長室に報告に来てくれた生徒達もいます。「自由で豊かな未来のために」をテーマとするプレゼン大会。題して『日経 STEAM2025 シンポジウム』。発表部門で全国2位相当の優秀賞をいただいたのが、大松葵さん、澤井星現良さん、澤村優奈さん、中山太賀くん、正置悠愛さんのチーム『おおとりっこ』。点字ブロックと車椅子との関係に着目したところが秀逸ですね。

くわえて、この大会の探究ポスター部門では秋田真歩さん、岩井光来さん、湯翔麟くん、三輪茉央さんのチームが優秀探究賞を受賞しています。せっかく報告に来てくれたので、最高の笑顔を掲載させてもらいました。さらに、ピアノのコンクールで入賞した表彰状を見せに来てくれた生徒もいます。担任の貝口先生が「せっかくだから…」と校長室に連れてきてくれたので、報告をお聴きしました。これも嬉しかったですね。

○ こうした日常の中で私が気にかけていること

とは言え、華々しく活躍する人がいる一方で、思うようにいかない日常に悶々とする人もいますよね。手を伸ばせば届きそうな場所でキラキラ輝かれると、焦りを感じたりもしますよね。そんなあなたとあなたと、あなたに読んでもらえたら嬉しい過去の通信があるので今回は付録で添えます。読んでくれると嬉しいです。

加えて、かつてはひっそり書いていた通信を公開しているのには理由があります。前任の西田校長先生から、引き継ぐ際に厳命された事柄のひとつがHP上の『校長の窓』の活性化だったのです。そこで『私にとっての通信』について書いたものも添えておきます。こちらはただの呟きなので、「時間があれば」どうぞ。

「すべての『この子』に幸あれ」

高校教育課長
新谷 浩一

○ それは僕が考えてもいないことでした

出張先でお会いした指導主事の方から声をかけてもらいました。「課長、昨年度の最終号、心に響きました」とのことです。かつて同僚であった関係でリクエストをいただき、毎週の通信を送らせていただいているが、彼女の心に響くほどのことを書いた覚えが僕にはなかったのです。で、どのあたりかと訊ねると、彼女は「『この子』のことですよ」と教えてくれます。それはこんな文章でした。

どの枝よりも早く空に向かって立ち上がり、どの枝よりも早く蕾をつけたこの子は、風の強い1月の始めに途中から折れ曲がってしまいました。僕は思慮なく窓を開けていたことを悔やむとともに考えました。このままで花は咲くのだろうか、と。

すると『折れた部分は切り落としてよ。また生き返るから』この子の声がそんな風に聞こえた気がしました。だから僕は膨らみかけの蕾をいくつも抱えたこの子の先っちょを半信半疑で切り落としました。すると1週間も経たないうちに切り落とした手前から、この子は新たな芽を伸ばし始めます。やがて他の子達が次々と蕾を開きましたが、この子はゆっくりと着実に芽を伸ばしていきます。

そして他の子達に遅れること1ヶ月、ようやくこの子の蕾も開きました。『信じてくれて有り難う』そう話しかけてくれます。咲かせた花はとても小さいけれど、きっと誇らしい気持ちで一杯なのでしょう。



おそらくこの子は僕らとは違う世界を生きています。ただ自分なりの花を咲かせることに集中して生きています。『これでいいんだよ』この子はそう話しかけてくれます。確かにそうかもしれません。すべて生命あるものは、この子のように自分なりの花を咲かせることが唯一正しいことなのかもしれません。

彼女は言葉を続けます。「課長が知っておられるとおり、私は鈍くさくて仕事がササッとできるタイプじゃないんです。でも、あの通信を読んで『あっ、この子は私や』って思ったんです。自分のペースでしか咲けないから人より仕事は遅いけど、それでも自分なりに丁寧に取り組んでいくことが大切なんですよね。そんなふうに課長に励まされた気がして、とても元気になれたんです」

それは想定外の嬉しい出来事でした。等身大の自分と『こうありたい』と願う自分。そのギャップを感じながら生きているのは皆、同じでしょう。でも、自分の弱さを認めた上でそれでも自分の精一杯の花を咲かせようとするのは容易なことではありません。だから、いい話だなあと心から思いました。

○ それは僕が考えてもいないことでした 2

また、過日は青雲高校の谷口校長から「スクーリングを見に来ませんか」と誘われました。青雲高校と言えば通信制高校。通信制といえば自学自習でレポートを作成し、提出を繰り返すのがメインです。月に数回は作成を助けるためのスクーリングもあります。そしてレポート合格とスクーリング出席の一定基準をクリアするとテストの受験資格が得られ、合格すると単位が認定されることになります。

「いやいや、これまでも複数回、見に行かせてもらっていますけど…」と僕は言いました。でも、「それは平日ですよ。日曜日のスクーリングを見に来てほしいんです」と谷口校長は言われます。確かに月に2度あるスクーリングのメインは日曜日。平日のスクーリングは日曜日に出席できない生徒のための予備日に他なりませんが、これまで日曜日に行くという選択肢はありませんでした。

ただ、確かに平日の青雲高校は長田高校と長田商業高校と施設を共有していることもあり、ぼやけるんですね。今まで複数回、出張していながらもスクーリングについて明確なイメージが持てていない僕は訪問させてもらうことを決めました。「私も見たいです」と名乗りをあげてくれた清水副課長とともに行くことになりました。



さて、当日。広い敷地内には 800 人程度の生徒。10 代から 70 代まで生徒の年齢層は幅広く、校則もありません。私服登校で髪の毛も色とりどりです。多くの生徒が月に 2 回程度しか顔を合わせない関係でもあるため、集まって大声ではしゃぐ生徒もいません。そこまでは予想どおりでした。でも、そこから先が僕の予想とは全く違っていました。

教室では様々な授業が行われていました。『英語入門』では『big の反対は small』という段階から授業をされていました。『言語文化』では定番の『羅生門』について 1 時間で解説をされていました。不登校経験者も多く、学習到達度は各自バラバラですから、先生方はそれぞれ様々な工夫を凝らしたプリントを用いて授業をされておられます。

デジタル機器を駆使して授業をされる令和型の先生もおられます。チョーク 1 本で勝負する平成型の先生もおられます。教壇から 1 歩も動くことなく語り続ける昭和型の先生もおられます。それは一般的な兵庫県立高校の姿です。ただ明らかに違うのは生徒の姿勢でした。教室には乾ききった砂漠の砂のように、一滴たりとも湿り気を逃すまいとする貪欲な瞳がいくつも並んでいたのです。『学びたい』という真っ直ぐな姿勢に目頭が熱くなりました。

新入学生の 6 割はこの春の中学校卒業者です。彼らの学年はコロナウイルス感染拡大を見据えた唐突な全国一斉臨時休業の最中に中学校に入学し、計 4 度の緊急事態措置の中で 3 年間を過ごしてきました。日々の学習、部活動、学校行事において、いわゆる中学生らしい学校生活を送ることもできず、その果ての高校受検。言わば翻弄された世代です。

谷口校長が教えてくれます。「『今年の新入生は入学式の姿勢から例年とは違う』と先生方が言っていました。みんな、ここからやり直そうと思っているんでしょうね」 そうかもしれません。ここに集う生徒 1 人 1 人も、きっと自分なりの花を咲かせたい『この子』なのでしょう。

そう言えば 3 年前、青雲高校生徒会の前期スローガンは『雲外蒼天』でした。色紙には『雲の上には青い空がある 希望を持って飛び立とう』とあります。校名を踏まえた素敵なスローガンです。

○ すべての『この子』に幸あれ

実は我が家の娘も『この子』の 1 人です。この春に高校受検をした世代。憧れていた希望校に入学を許されたものの開始早々に学校に行けなくなってしまったのです。理由を訊ねると「理由はわからないけれど、授業中に涙が止まらなくなるから教室に居れなくて…」と口にするだけです。

マイペースな頑張り屋さん。ただ、塾らしきものに通ったことのない娘にとって、高校の授業の緊張感は厳しすぎたようです。「どうしたものか」そう悩みましたが、ある方にこう教えてもらいました。

「私も高校 1 年生の最初は行きたくない日々でしたから、共感を覚えますけどね。『嫌々の毒』が抜けない感じですかね。1 学期中に毎日行くことが普通に感じられるようになればいいな一くらいの気持ちでいいと思いますよ」

そこでこの言葉と娘を信じて、何も言わずに見守ることにしました。結果、2 週間休みはしましたが、娘は再び登校し始めました。今は元気です。まだ当時の話はできていませんが、もしかすると『嫌々の毒』が抜けたのかもしれない。

すべての『この子』に幸あれ。心から、そう願っています。
やがていつか、それぞれが自分なりの花を咲かせることができますように、と。
青雲高校からの帰り道、見上げると雨上がりの空に小さく虹がかかりました。



「時間の流れは早いもので…」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ ただの振り返りです

30歳を過ぎたあたりから私は校務分掌や異動について希望を出さない教員になりました。当時の校長先生から『何でもお任せくださいと言えるくらいに大きい人間になれ』そう言われた時、半ば反発心からそう決めました。結果として初任校で3年勤めたあと、母校で11年、事務局で20年勤めました。

校務分掌はずっと担任でした。学級通信を始めたのは初任校の時です。学校からのプリントを保護者に渡さない生徒が大半でしたので、彼らの日常を面白おかしく、しかも少し持ち上げて通信にしたら、持ち帰って保護者に見せてくれるかな、という実に不純な動機からのスタートでした。でも、実際はそれぞれが自分にとって都合の良いものだけを保護者に見せていたみたいで、まあ、成否は不明ですね。

母校では毎日通信を書くようになりました。調子に乗ってクラブ通信も発行したりしていました。『働き方改革』なんて言葉がない時代でしたから、部活動指導が終わった18時くらいからひたすら職員室横でパソコンを叩いていました。当時の私には生徒に伝えたいことが山ほどあったのです。

やがて教育委員会事務局で働くことになりました。何かを伝えたいと思う相手はいなくなりました。朝から晩まで仕事に追われ働きました。やがて高校教育課長を任せてもらえることとなりました。その時に気づいたのです。「ともに働く仲間達に伝え残さないといけなことが自分にはあるのでは」と。

近づくだけで鼓動が激しくなるくらい眩しい先輩がいました。「これをオーラと呼ぶのか」そう知りました。一方、指導と称して言葉尻をとらえては理詰めで厳しく叱りつける先輩に鍛えられもしました。その双方の影響を受けたにもかかわらず、気づけば私はどちらにも属さない先輩になっていました。武器がないのです。そこで始めたのが課長通信です。「とりあえず言葉しか自分に残せるものはない」そう悟ったのです。毎週月曜、通信を出すことにしました。2年で120枚ほどになりました。

さて、この3月、新たな内示をいただきました。加古川東高等学校長という私には畏れ多い内示です。職員名簿を確認します。会話したことがあるのは原田先生と上村事務長、久保田主査くらいでした。『はじめての校長職』を『はじめまして』から始まる方々に囲まれて務めるのです。不安でした。

その頃、校長通信を書くと言うことは考えてもいませんでした。そもそも書く必要があるとも思っていませんでした。ただ、私を送り出す高校教育課の課員達はさも当然といった顔をして私に話しかけてきました。「4月からは校長通信ですね。ちゃんと僕らにも送ってくださいよ」と。

実際に4月になって赴任してみると、ここには学校通信をはじめ多くの魅力的な通信が出されていました。「これなら出番はないな…」そう考えました。それでも暗中模索であった立ち上がりの2週間、多くの先生方、事務室の方々に支えられて何とか終わることができた時に気づいたのです。「ここで働く皆さんに感謝の気持ちを伝えることなら、私にでもできるのではないかな…」と。

校長室のドアを開けっぱなしにしておくと、困りごとを相談しに来てくださる先生方がおられます。戯言のような通信に触れ、「先生の通信、楽しみにしていますよ」そう言ってくれる横山先生がおられます。父の死に触れた通信を出した翌日、富田先生は朧月の思い出話をしに来てくれました。体育祭で一緒にリレーを走った直後に三谷先生は「楽しすぎました」そう笑いながら走り寄ってくれました。

学校長として期待されている役割を果たせているか、そのあたりは疑問符がつきますが、皆さんとの繋がりのおかげでここまで大過なく、しかも楽しみながら日々を過ごせています。ただただ感謝しています。

